

目 次

はじめに 殉教者にならう生活の中の証し カリタスジャパン責任司教 菊地 功	2
この冊子の使い方	4
スペイン語訳、ポルトガル語訳のご案内	5
四旬節第1主日に	6
孤独を訴える声に寄り添う 祈りを支えに電話の応答	
四旬節第2主日に	11
娘から教わった人間の価値 全盲・知的ハンディ背負って29年	
四旬節第3主日に	16
若者の実像を知ってほしい 人生の舵を切って困窮者支援	
四旬節第4主日に	21
小さな生命をいつくしむ社会へ 「こうのとりのゆりかご」は願う	
四旬節第5主日に	26
今日のいのち、喜ぶ人々と共に 最貧国シエラレオネ支援30年	
受難の主日に	31
生活の安全を援護 外国人のための医療相談会	
On Passion Sunday	
Ensuring the Security of Life	36
Medical Consultation for Foreign Residents	
あとがき 過越の物語を生きる カリタスジャパン担当司教 幸田和生	42
注記ならびにその他情報	43
お知らせ 社会系各委員会発行物のご案内	44
2009年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	46

殉教者にならう生活の中の証し

カリタスジャパン責任司教 菊地 功

信仰を生きる。そう口にするのは簡単なことです。しかし私たちは実際に、信仰をどのように具体的に生きているのでしょうか。「信仰をどう生きているのか」。それが、私たち一人ひとりに対する、四旬節にあたっての問いかけです。

教会は四旬節にあたり、祈りと節制と愛の業という3点をもって、信仰を問い直す「時」を私たちに与えています。社会の現実の中にあつて、私たちは様々な人間関係の中で、信仰を生きていかななくてはなりません。「祈りと節制」は、自分自身の内的な問題と考えることもできるのでしょうが、「愛の業」は、その対象となる「相手」の存在無しには成り立ちません。四旬節にあたり「信仰をどう生きているのか」という問いかけは、すなわち他者とのかかわりの中で、私たちが「愛の業」をどのように実践しているのかという問いかけでもあるのです。「たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい（一コリント13・2）」と書かれているとおおり、真摯に信仰に生きることは、すなわち愛に裏打ちされた実践に生きることなのです。それが私たちの信仰の「証し」です。

昨年11月24日、ベトロ岐部と187殉教者の列福式が、長崎で執り行われました。信仰を貫いて厳しい時代を生き抜いた殉教者が教会から福者と認められるという、日本の教会にとって大きな恵みの時でした。

信仰を守るために生命を賭した殉教者の存在は、現代社会に生きる私たちに、何を教えているのでしょうか。殉教者は単に勇気がある「ヒーロー」として褒め称えられ崇められる存在なのではありません。彼らは徹頭徹尾、神に信頼し神により頼む生き方をした人々として、私たちに信仰に生きる道を教えているのです。殉教者は、神との完全な一致を求めて、イエス・キリストを自らの人生の中心に据えた生き方をした人たちでした。彼らが生きた時代に支配的な価値観に対峙して、福音的ではない生き方に隷属することを勇気をもって拒んだ人たちでした。

ギリシャ語の「殉教」という言葉は、もともと裁判などでの証言を意味する「証し」が語源です。「あなたがたはこれらのことの証人となる（ルカ24・48）」というイエスの言葉に従い、多くのキリスト者がその生と死を通じてイエスの「証人」であろうと努めたのでした。ですから、私たちは殉教者がどのように生命を捧げたのかに注目するだけではなく、どのように信仰に生き、また「証し」に生きたのか、にも目を注ぎたいと思います。

新潟教区の米沢で生命を捧げた53名の殉教者が、この度の188殉教者に含まれています。キリシタン禁制の時代に、ルイス甘糟右衛門という上杉家の家臣ひとりから始まって、3000人を超える信徒が米沢の地に誕生したといわれます。信仰することが自らの生命を賭することになるやもしれない状況の中、それほど多くの人たちが仲間に加わったのは、当時のキリシタンが、多くの人たちにとって魅力のある生き方とかかわり方をしていたからに違いありません。殉教の日、北山原の処刑場で斬首されようとしたまさにそのとき、奉行が見物人に向かって土下座をするように求めたという話が伝わっています。それほどまでに多くの人の尊敬を受けるような生き方をしていたのです。生命を賭した状況の中であって、当時のキリシタンたちが信仰に生き忠実に実践していたからこそ、彼らはイエス・キリストの証人となりました。

現代の日本社会において、信仰のために生命を捧げ殉教する状況に直面することはないのかもしれませんが。そうであるならばなおのこと、人生を通じてイエス・キリストを証しする術を探らなければなりません。信仰をどう生きるのか、その道を真摯に探求しなければなりません。

社会の中であって弱い立場に追いやられた人々、苦しみと困難の真っ直中にある人々の心からの「叫び」に耳を傾けることから始まった四旬節小冊子は、「叫び」からの「ひびき」を聞くことへと受け継がれました。そして昨年、「ひびき」を「つなぐ」ことを目指して歩みを進めています。今年の「つなぐ」編集メンバーは、現代社会にあって、どのようにキリストの生き方を証しすることができるのかという視点から、現実を見つめ直そうと取り組みました。殉教者の心を思い起こし、彼らの精神を受け継ぐ私たちが、いまどう信仰に生きるのか。その問いかけから、「つなぐ」を読み進めてくださることを願います。

この冊子の使い方

- ・この冊子は、四旬節の間、私たちの生活を見直し、回心し、神との交わりを深め、主イエス・キリストの復活を喜び迎える準備のためのものです。
- ・四旬節の間、1週間に1つずつ読みながら、黙想します。第1の話を四旬節第1主日に、第2の話を第2主日に、第6の話を受難の主日に、というように読み進めていきます。
- ・まずは体験談を載せてあるので、それを読んで、自分の生活をふりかえてみましょう。それを読み、ひびいてくるところを通して、自分の信仰生活や社会とのかかわりを見つめ直しましょう。
- ・また、さらに深めようと思われる方は、ふりかえりのページがあるので、それを参考にしてください。
 - 1) 体験談を読んで、感じたことをまずは味わってみましょう。グループで使用する場合は、感想を皆で分かち合うとよいでしょう。
 - 2) そして、自分の生活と社会のあり方を見つめ直します。体験談を参考にした上で、1つか2つのヒントがあります。それを参考にし、ふりかえてみましょう。グループの場合、それも分かち合うとよいでしょう。
 - 3) 時間があるならば、その日の主日の福音をもう一度読み直してみましょう。そして、沈黙のうちに黙想してみましょう。ふりかえりを通して、福音がより深くひびいてくるかもしれません。そのひびきを心で味わいます。グループの場合、皆で黙想の時間をとることをお勧めします。
 - 4) 最後は殉教者の取りなしを願って、祈りで締めくくります。昨年の11月24日にベトロ岐部と187殉教者が列福されました。現代の問題意識と全く違う面がありますが、信仰の大先輩の取りなしによって、現代の日本に神の恵みが注がれるように祈ることは意義深いと思います。祈りの例文があるので、それをそのまま唱えてもよいです。または、自分で自由な言葉で祈りを捧げてよいでしょう。

スペイン語、ポルトガル語訳のご案内

Se puede leer en español “Apoyo para conseguir una vida más segura – Grupo de consultas médicas para extranjeros” en Internet.

Poderá ler o artigo “Salvaguardar uma vida mais saudável – Consulta Médica para estrangeiros.” pela internet, na sessão de língua portuguesa.

今回初めて、「生活の安全を援護—外国人のための医療相談会」を英語に翻訳して掲載しました。

スペイン語、ポルトガル語も翻訳しましたが、小冊子に掲載するのは紙面の都合で難しいため、ホームページからダウンロードできるようにしました。スペイン語圏、ポルトガル語圏のお知り合いの方にご案内ください。

URL スペイン語 <http://www.caritas.jp//contributi/pdf/es2009.pdf>

ポルトガル語 <http://www.caritas.jp//contributi/pdf/pt2009.pdf>

For the first time, this booklet includes an English version of the article “Ensuring The Security Of Life – Medical Consultation For Foreign Residents.” There are also Spanish and Portuguese versions. Due to limitations of space, however, they are not included in the booklet but posted on our homepage to be downloaded at:

URL Spanish : <http://www.caritas.jp//contributi/pdf/es2009.pdf>

Portuguese : <http://www.caritas.jp//contributi/pdf/pt2009.pdf>

Esta vez después de traducir “Apoyo para conseguir una vida más segura – Grupo de consultas médicas para extranjeros”, lo hemos colgado en la red.

Como nos resultaba más difícil imprimir el panfleto en papel, hemos optado por prepararlo para que lo bajen de nuestra página virtual.

URL <http://www.caritas.jp/contributi/pdf/es2009.pdf>

Pela primeira vez, o artigo “Salvaguardar uma vida mais saudável – Consulta Médica para os estrangeiros” foi traduzido e está sendo publicado.

Na dificuldade de publicar em panfletos, possibilitamos a leitura, abrindo o Home Page e fazendo down-load.

URL <http://www.caritas.jp/contributi/pdf/pt2009.pdf>

孤独を訴える声に寄り添う

祈りを支えに電話の応答

自ら生命を絶つ事件や近親者による殺人が毎日のように報道されるなか、カトリック福祉施設で長年働いてきた渡辺^{わたなべかずよ}和代さん（仮名、65歳）の周囲にも孤独を訴え、人とのつながりに苦しむ人が多い。

普段、事務室で仕事をしていると電話がかかる。受話器のむこうから聞こえる訴えに、本来の仕事ではないが断ることもできず、渡辺さんは相談の相手をする。息子が30歳になっても仕事が無く家から外へ出ようとしない。小さい時に受けた心の傷から抜け出せず、子どもをたたき続けてしまう自分が恐ろしい。認知症の親の不可解な行動に疲れた。仕事場が2年後に閉鎖されると知って酒におぼれる夫に絶望した。そんな女性たちの叫びが日々押し寄せてくる。渡辺さんの話は、私たちが信仰を持ちつつ、日常生活の中で苦悩する人々に、どのように接したらよいかを考えるヒントになるものだった。

うつ病の経験が恵みとなって

渡辺さんは小さな山里で生まれた。周囲の人々はやさしく、問題はこれといってなかったが、何か不安で物足りなかった。限界のある人間ではなく、もっと普遍的な何かを見つけたかった。ある日、村に教会が建ち、神様がいらっしゃると感じ洗礼を受けた。信者として果たすべきことを司祭に相談すると、カトリック福祉施設を紹介された。

ところが数年たって、職場の人間関係に行き詰まった。リーダーは厳しい人で、渡辺さん自身はそれほど叱られなかったが、同僚がしばしば怒鳴られた。「やる気が無いんじゃないの。何回言ったら分かるの。失敗ばかりして、理由を言ってごらんなさい。そうやってにらみつけて私

を馬鹿にしているのね」。怒られている人の恐怖が伝わってきた。あの人の家族はこの光景を見たらどんなに悲しいだろうかと思い、上司の大声に手が震えて汗が噴き出した。自分が弱い人間だから、他の人にとってはなんでもないことでも鋭い刃物で心を突き刺されるように感じてしまうのだろうと考えた。日増しに手足が冷たくなって眠れなくなり、仕事をしようという気力がなえた。人と話をするだけで涙があふれ出す。

神経科の医師は入院を告げた。毎日薬を飲み、3週間眠り続けた。その間は暗い深い穴の中に入っているようで、この世から自分を消してしまいたいという誘惑以外は何も考えられなかった。孤独だった。

彼女を救ったのは眠りと時間の経過、そして教会の仲間の存在だった。病気が回復してくると声にも元気が出て、苦しかったことを少しずつ話せるようになっていった。この経験は恵みとなった。神様を捨てなかった自分に自信が持てたし、神様は私でも生きていて良いと認めてくださったのだと信じることができるようになった。

電話をかけてくる相手は何を求めているのか

その後、施設の仕事を通して知り合った様々な人たちと話をするようになり、個別に苦しい気持ちを電話で訴えてくる人も増えた。電話をかけてくる人が求めているものは様々だが、共通するのは、自分は誰からも愛されていないと感じていることだった。「とにかく話を聞いてほしい」という声からは、孤独から抜け出せない寂しさ、苦しさ、痛みが切々と伝わってくる。

「誰かに打ち明けたかったのでしょうか。ひとりで苦しんでいるのって辛いじゃない。相手が私を選んだということは、イエス様が私を選んだということ。専門家でもない者が心の病んだ人の相談に乗ってはいけないという意見もあるけれど、断れないじゃない。私がそうだったように、独りになりたいと思うこともあるけれど、独りでは生きていけない。理解して欲しい、愛して欲しいと叫びたくなることもあるでしょう」。

病院に行けば対処薬は出してくれるが、黙って話を聞いてくれる医師

が少ないことも相談者から知った。たとえ話を聞いてくれる医師に出会ったとしても、孤独が癒やされるとは限らない。目標も生きる場所さえも失って周囲から孤立してしまうことが問題の核心だ。

相手は自分の問題を解決して欲しいのではなく、ひたすら自分の苦しい気持ちを分かって欲しいと望んでいる。「あなたのお祈りのおかげで元気になりました」という言葉は、「私に関心を持ち、力になろうとしてくれてありがとう」というメッセージだ。相談者の話の中に、幼い時に教会で良くしてもらった、幼稚園・保育園のシスターにやさしくしてもらったという思い出がでてくることが多い。幼い頃に大切にされたという宝物のような記憶をなぞっているのだろう。だから渡辺さんも、真剣に正面から向き合う。相手は不安や苦しみを取りのぞくために相談をしに来たのではなく、人間としてつながるために来たのだ。神様の計らいでこの人に会えたと感じるようだ。

祈りに支えられて

なかには、不安が高まると、夜中や早朝に電話をかけてくる人がいる。渡辺さんはセミナーや講演会で対応の仕方を学ぶ機会も作っているが、いざとなれば荒々しい声の調子に恐怖し、どのように返事をすれば良いかを相談する相手はその場にいない孤独感に襲われる。電話を切りたくなる気持ちを抑え、心の中ではマリア様への祈りを繰り返しながら、「そうなの、そうなのね」と相手の話を聞き続ける。

渡辺さんは関節がひどく痛み、加えて今でも不安に沈む時があり、薬は手放せない。「神様から私に与えられた力は相手の話を黙って聞くこと。それでも調子が悪い時は傷ついた人々から声をかけられると逃げ出したくなるのです。そんな時は、神様が勝手に私をこの場に置かれたのだから、最後の責任は持ってくださいと祈ります。力を尽くせないことがあっても、神様に祈ればゆるしてもらえるとという安心感が心の支えです」。渡辺さんの祈りは神様への信頼感の表れだ。

心の平和への出発

ある朝、たまたま草むらに座り込んでいるスーツ姿の中年男性に出会った。通り過ぎようとしたが気になって声をかけると、男性は興奮気味に「仕事で失敗し、うつ病と診断されて車に飛び込もうと思ったけれど死にきれなかった」と震え声で話しはじめた。仕事を求めて夫婦で都会に出て朝早くから夜遅くまで働いたが、住宅ローンに追われて生活にゆとりはなかった。近所との付き合いはなく、それどころか夫婦の出勤帰宅時間は異なり、子どもも塾から帰れば自分の部屋に入ったきり。部屋も食事も別々で家族が一緒にいる時間は無かった。そんな家族に自分の失敗を話せないし、同僚に話したら笑われ、病気のせいで解雇されると思うと死ぬことしか考えられなくなったという。

男性は思いの丈を吐き出して落ち着いたのか、渡辺さんの連絡で迎えに来た奥さんに「ごめんね」と静かに言い、渡辺さんに丁寧な礼を言って去って行った。その寂しげな後ろ姿を見送りながら、周囲に多くの人があいても心を閉ざしてしまっている孤独感が、渡辺さん自身の過去に重なった。

そして、沖守弘氏の著書「マザー・テレサ あふれる愛」で読んだマザーの言葉を思い出す。「誰からも必要とされず、誰からも愛されていないという心の貧しさこそ、一切れのパンの飢えよりも、もっともっと深刻です」と。

「孤独は不安をより大きくします。神様なんかいないのだと信じ込ませようとする力がいつも私たちに対して働いています。苦しみや不安が無くならなくても、自分がどんなに神様に愛されているか、イエス様なら何を大切にされるかを自分に問い続ける必要があります。重要なことは、日々の生活の中で身近な人たちと向き合い、話を真剣に聞くことです。そして、相手への優しい言葉づかいが平和への出発点です」と、マリア像が飾られた小さな部屋で穏やかに話す小柄な渡辺さんには、さわやかな笑顔が似合う。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いたでしょうか。何が心に残ったでしょうか。それを静かに味わってみます（グループでふりかえる時は、皆で感想を分かち合いましょう）。

2) 生活と社会を見つめ直して

- ・あなたは誰かの悩みを聴いたことがあるでしょうか。それはどのような体験だったでしょう。その体験をふりかえてみて、今、気づくことがあるでしょうか。

3) 主日の福音を黙想する

- ・「イエスは40日間、 荒れ野にとどまり、サタンから誘惑を受けられた」（マルコ1・13）

私たちが暮らす現代社会をひとつの「荒れ野」として想像してみましよう。どのような厳しさやつらさを荒れ野として感じるでしょうか。この荒れ野で、イエスは何を感じ、何を考えられたでしょうか。

- ・「時は満ち、神の国は近づいた」（マルコ1・15）

荒れ野の体験を乗り越えて、イエスは、「救い（神の国）が近づいた」と宣言しました。その救いは今、何を通して、誰を通して近づいてきたと感じられるでしょうか。

4) 祈り－殉教者の取りなしを願って－

福者ペトロ岐部と187殉教者の取りなしを願って、例えば、最後に次のように祈りましょう。「主よ、現代社会でさまざまな苦しみがあります。耳をふさぐことなく、その苦しみの声を聴くことができますように。苦しみから逃げることなく、殉教者のようにむしろそれに直面していく勇気をお与えください」など。

娘から教わった人間の価値

全盲・知的ハンディ背負って29年

人生の困難に直面したとき、人はどうやってその困難を受けとめ、その後の生き方がどう変わっていくのか。佐々木真一さん・美恵子さん（ともに仮名）夫婦に授かった彩さん（仮名、29歳）は、全盲で知的ハンディキャップを持つ。障がい気づいてから現在まで、苦悩から喜びにいたる軌跡には、しかしずさまじい日々が重なっている。

生後10カ月で失明、知的ハンディも

「娘が生後10カ月のとき、目の様子が気になって診察に行くと、網膜芽細胞腫もうまくがさいぼうしゅという目のガンであることが判明しました。手術で目を摘出しましたが、術後の娘を見て、それまでの娘とは顔かたちが変わってしまい『この子、彩ではない!』と、とても受け入れられませんでした」と父親の真一さんは語る。また目が見えないということは昼夜の区別がつかないので、夜中でもトイレの世話など夫婦が交代で24時間休むひまなく、面倒をみなければならず、娘の存在は「自分を苦しめる以外の何物でもありませんでした」と当時を顧みる。「できれば人の目を避けたい」「この子にどんな価値があるのか?」との思いが胸にあり、「知的ハンディのある子どもの価値はどこにあるのか?」ということで悩み続け、この答えが見つけれられない限り、この苦しみは受け入れられないと思った」という。

街頭で暴れる子、恥ずかしくてたたく

真一さんは化学製品のメーカーに勤務しており、毎朝出勤の時、盲学校のスクールバスの停留所まで彩さんを送っていくのが日課だった。小

学2年生のとき、駅近くの人通りの多い道で彩さんが突然大声で泣き、ひっくり返って暴れて、周りに人垣ができた。真一さんは恥ずかしさのあまり、思わず彩さんをたたき、引きずってその場を逃れた。これは真一さんにとって、世間との壁を強く感じざるを得ない出来事だった。背広を着ているときは見栄や世間体に気が行ってしまい、「その恥ずかしさから早く逃げ出したい」という気持ちが手荒い行動に走らせてしまったのだ。しかも同様の事態は何回か続いた。

無邪気な寝顔を見て感じた「心のうずき」

そんな日はいつも心が重く、曇った思いがあった。ある夜、娘の無邪気な寝顔をみているとき、心がうずき涙を流しながら気づいたことがあった。「私が恥ずかしいというのは私の問題であって、目も見えず、知恵も遅れ、口もきけない娘にとっては、何の関係もないことではないか。私自身の中で解決すべきところを娘に転嫁しているだけなのではないか」と。心のどこかで割り切れないもの、引っかかるものを常に感じ、時に手を上げてしまう行動の原因が、彩さんではなく、自分が見栄や世間体にとらわれていたためだということ、そしてそのしわ寄せは弱い立場の子どもに行くということに気づいたのだった。ここまで来るのに7年の歳月を要したが、この克服をきっかけに彩さんは真一さんの心の中で生き始めた。

「信仰と光」の集まりで得た喜び

彩さんが小学生の時、ジャン・ヴァニエ氏（注1：43ページ）のことを本で知り、会いたいと思っていたところ、たまたま佐々木さん一家の所属教会にラルシュ（注2：43ページ）の人がせっけんを販売に来ており、ヴァニエ氏の黙想会があることを教えてくれたので、それに参加した。同氏は知的ハンディのある人との共同生活を通して人間として大事なものが何であるかを教えられ、自分を変えられていることに気づいたと、その著書の中で述べている。真一さんはこの黙想会を契機に彩さんが小学6年生の時から「信仰と光（注3：43ページ）」の活動を始め

た。「信仰と光」とは、知的ハンディを持った人と家族、友人になりたいと思う人たちが、ともにいることを互いに喜び祝う交わりの場として、毎月集まりを続けている。「『信仰と光』の活動を始めて15年が経ちますが、人数は決して多くありません。規模は大きくならなくても、全国に小さな『信仰と光』の活動場所があるようになれば、と望んでいます」。

その後、「所属教会にある神父様が来られ、ミサを捧げられた時のことです。私たち家族は参加しなかったのですが、ミサ後の懇親会で『彩さんのような方が通う教会は恵まれた教会です。あのような人は神様を運んでくれるのです』と言っておられたということを知りました」。真一さんは「この言葉はうれしかったが、それ以上に、この子の仕事は『みんなのところに神様を運んでいくこと』なのだ、と気づかされたことが大きな励みになりました」と言葉を継ぐ。

ジャン・ヴァニエ氏とその著書との出会いを通して分かったことは「神様は『心を開いた交わり』を私に気づかせてくれるためにこの子を遣わされたのだということです。そしてそれは私だけでなく、多くの人に伝えるために神様が選んでくれた恵みだと思えたのです。『この子が自分の与えられた使命をこの子らしく生きるということであるならば、この子の障がいを恥ずかしいと思ったり、内に囲ってはダメだ』、と思うようになりました」と真一さん。長い間、明快な答えが見つからず苦しみ続けた問いに対する答えは真一さんにとっての「福音」だった。

母が娘の価値を納得できた時

母親の美恵子さんも「長い間、つらい時期がありましたが、今は少し心に余裕ができ、娘がかわいし、『この子は社会にとって必要な存在だ』と思えるようになりました。でも未だに答えの見つからないところもあります。落ち込んだり立ち直ったりを繰り返しながら、少しずつ娘の存在価値が分かってきたような気がします。思い起こせば入学式、卒業式などの節目には、心のどこかで満たされない思いがいつもあるのを

感じていました。娘には申し訳ないけれど、心底喜べない、そんな自分を責めたこともありました。そんな時期を経て、心からこの子でよかったと実感したのは彼女の成人式のときでした」と当時のことをふり返る。「みんなが手伝って、娘に振り袖を着せました。本人の喜ぶ姿がさらに周りの人を幸せにしてくれていると感じたのです。娘の弱いところ、足りないところが周りの人たちの心の中にあるやさしさを引き出して、ともに喜ぶ、楽しさと幸せの輪を作ってくれました。このとき、この子には価値があるということを頭ではなく体で感じることができました」、「娘にはできないことがたくさんあります。それを補うためには他人の手助けを必要とします。その手助けを娘は自然に受け入れます。それを見ていると、できなくても良いのだと思えてきます」。

上昇志向とは別の生き方を学ぶ

真一さんは悩みぬいた末たどり着いた境地を、こう締めくくった。「いわゆる健常者は競争社会、上昇志向に生きています。この生き方は自己防衛のために自分の周りに壁をはりめぐらしています。かかわりではなく壁をつくって生活しています。この生き方の対極にあるのがダメな人と思われている知的ハンディを持つ人たちです。彼らは、人間はどんな状況にあっても、かけがえのないものなのだ、ということを教えてくれているのです。神様がこういう人たちを世に送り出された理由、存在理由はここにあると思います。『社会にそして一人ひとりに神様のメッセージがこの人たちによって与えられている』のだと思います。これが私と妻が見出したことであり、この発見が闇から光への転換点です。『信仰と光』との出会いが、あの神父様の一言が、私たちをそこへ導いてくれたのです」。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いたでしょうか。何が心に残ったでしょうか。それを静かに味わってみます。

2) 生活と社会を見つめ直して

- ・自分自身・家族・知り合いの中に苦しみ（ハンディや病気など）をかかえている人がいるでしょうか。その苦難や苦しみを一度ゆっくりと味わってみましょう。
- ・そのハンディや苦しみを通して、神様が近くにいる感じがするでしょうか。闇から光への転換点があるでしょうか。そのヒントとなるようなものを探してみましょう。

3) 主日の福音を黙想する

- ・主の変容（マルコ9・2-10）の場面をもう一度読んでみましょう。普通の人間イエスが突然、神様としての輝きを発せられる姿を見つめてみましょう。私たちの生活の中の何気ないものや価値がないと思えるものが、神のような輝きを発することがあるかもしれません。信仰の心で、日常の出来事や苦しみをみつめてみましょう。

4) 祈り－殉教者の取りなしを願って－

「だいじょうぶ、もうすぐすべてがはっきり見えるから」（福者橋本テクラ=京都の殉教者）。

「殉教者が苦しみの中でもパライソ（天国）を見つめることができたように、私たちも日々の苦しみの中で希望を失わず、歩んでいけますように。神の恵みを少しでも見いだしながら、感謝のうちに歩んでいけますように」。

若者の実像を知ってほしい

人生の舵を切って困窮者支援

この1～2年「ワーキングプア」「若者の貧困」「若者の危機」などの表現をメディアで度々目にするようになってきている。なぜ今若者の問題がこのように取り上げられるのか？ 若者自体が変わってきているのか？ それとも何か他に要因があるのだろうか？・・・生活困窮者の支援活動を行うNPO法人の事務局長Aさん（39）に話を聞いた。

Aさんが現在の活動を始めたきっかけは、1995年に同じ大学院の友人が公園で野宿者の支援活動をしているのを見学に行ったことだった。初めからこの問題に関心があって行ったわけではなかったが、現場に行ってみて「なんで同じ人間がこんな目に遭わないといけないのか？」と強い問題意識を持った。さらに、その後も継続してボランティアとして活動に参加するにつれ、心の中では、「このままでは現場を離れられない。離れたくない」という気持ちが強くなっていったという。こうして人生の舵^{かじ}を大きく切って、野宿者支援の活動を始めたAさんは、その後「野宿の人は生活が懸かっているのに、自分はボランティアでやっている限り生活が懸かっていない」と活動に限界を感じ、生活することと活動することを一緒にするため、路上生活者のための収入創出事業を始めた。現在は非常勤スタッフ4～5人と、路上生活者だけでなく広く生活困窮者全般に対する支援活動をしている。

路上生活者の中に若者が増えた

Aさんが支援活動を始めた95年頃は、路上生活者の中に若者の姿を見かけることはほとんどなく、たまに出会うと驚くほどだった。しかし、

2000年頃から、路上生活者の中に若者がいても驚かなくなった。現在生活困窮者でAさんのもとを相談に訪れる人の約半数は20代、30代の若者だという。Aさんは「これらの現象は不思議なことでもなんでもない」と分析している。もともと日本の公的社会保障は弱かったので、日本社会では家族と企業がずっと若者を支えてきていた。しかし、核家族化が進行する一方、自分自身の老後にすら不安をかかえる人が増えてくると、家族が若者を支えられなくなってきた。一方企業は、社員の生活の面倒までみるのは自分たちの仕事ではないと方針を転換してきている。そんな状況の中、2000年代に入って雇用条件に変化が起り、若年層の非正規労働者が増えてきた。併せて日本の社会保障費削減傾向が加速すると、その結果として、一生懸命働いて努力しているのに、周りからの支援が受けられなくて生活困窮に落ち込む若者の数が一気に増加してきた。特に都市部では、仕事はしているが思うような収入が得られず、路上ではないまでもインターネットカフェ（注4：43ページ）などに寝泊まりし、不自由な生活を余儀なくされている「ネットカフェ難民」が社会現象化している。

所持金がなくなるまで自助努力

Aさんのところに相談に来る若者には、所持金が10円とか100円とかになってしまってから駆け込んでくる人が多い。なぜもっとお金があるうちに相談に来ないのかと疑問に思うが、本人は「まだ2000円も3000円も残っていたら人に頼っちゃいけないんだ。若いんだから自分でなんとかしないといけない」という意識が働いて頑張るものの、うまくいかず行き詰まってしまう。こういった場合は、相談に乗って元気づけ、「頑張って就職活動しなさいよ！」ではうまくいかない。ずっと努力してだめだから相談に来る訳で、緊急対応として生きていくための生活保護の申請を手助けする。こういった人たちは必要条件を満たしているので、たいがいの場合申請は通る。相談に乗って生活保護を受けるまでは機械的手続きで進むが、そこから先仕事を探して再就職するまではなかなか容易ではない。相談に来る人は所持金が無いだけでなく、精神的に傷つ

いてふらふらになって駆け込んでくることが多く、そこから立ち直るまで長い時間を要するケースが多いからだ。

「甘えるな」「だらしない」というけれど

また、Aさんは「本人対応の大変さ以上に社会の偏見の壁にぶつかる方が大変だ」という。働いているけれど食べていけない若者に対して、社会の目は、「私たちも辛い中で頑張ってきたのに、今の若者はだらしない」「甘えるな」「自業自得だろう」と見てしまう。時代が変わって、若者が置かれている社会的背景が変わってきているのに、本人の問題として片付けてしまう。そして、「甘えるな」「だらしない」「努力が足りないんじゃないか」と非難されると、ますます追い込まれる。「社会的な偏見で本人がつぶされてしまうんですね。そして、社会的なハードルが高すぎていつまでたっても抜け出せない」。現代の若者を取り巻く社会の実情を多くの人が認識して、社会の考え方が変わってくるようになるためにも、活動を継続していかなければならないと、Aさんは考えている。

19歳の若者が1年で別人のように

Aさんは19歳の一人の若者との出会いを次のように話す。「その若者は両親が離婚して父子家庭で、中学2年生から学校に行っていない不登校生だったんです。19歳でも働いていなかった。父親が頑張りすぎてうつ病になり、父親本人が『死にたい』と相談に来られたのが彼との出会いのきっかけでした。学校にも行かず、仕事もせず、髪はぼうぼう、ひげも伸びっぱなし、目が悪いのに眼鏡もかけていない。毎日何かをするということもなく、表情も無く反応も無い、無気力の典型という状態でした。それで、何も用が無くても事務所に来てもらったりして、若いスタッフが中心になってできるだけ一緒にいる時間を長く持つように心がけたんです。そうしていくうちに、徐々に人になじんでくる。半年くらいたって本人に段々と変化が出てきたんです。髪を切る、ひげを剃る、眼鏡も作る、日常のあいさつをするようになって、笑いも出るようにな

ってきた。そうしたら退屈を感じるようになって、何かしないといけな
いんじゃないか、何かしたいと思うようになったんですね。それまでは
退屈を感じることも無かったのに、自分は何がやれるのか探すようにな
ったんです。そして定時制の高校に行きたいと言い出して、08年4月か
ら昼間は私たちの支援事業で働きながら夜は高校に通っています。1年
前とは別人のようにちゃんとした若者になりました。

一見何を考えているか分からない、なんの取り柄も無い、努力もして
いないし、自暴自棄、そういった若者を、社会の人はその目の前の現象
だけを見て「自業自得だろう」と片付けてしまっていないだろうか。し
かし、この19歳の若者のように、各々それに至る背景や事情があり、仕
方なくそういった状態に落ち込んで抜け出せないことを思いやることが
必要ではないか。「その瞬間だけ見るとほっとけばいいと思われる人
でも、そこに至る経緯を理解し、ケアに時間がかかるがサポートすれば変
わっていくことを分かって欲しい。全体を見て欲しい、人間を人間とし
て見て欲しい」とAさんは訴える。

教会をシェルターにする国も

95年にAさんが野宿者支援を始めた頃、活動にかかわっていたのは社
会問題に関心を持つ学生かクリスチャンくらいしかいなかったそうだ。
その後何年かして活動の輪が広がった。そういった意味では、これまで
日本の教会は、光の当たらない所に光を当てる先駆けとなってきたとい
える。Aさんは、日本の教会に期待を込めて次のように話す。「教会を
頼って来る人は他の場所に比べてかなり多いでしょう。海外では教会を
シェルター（避難所）（注5：43ページ）として開放しているところも
あります。いま日本の教会がシェルターとして開放されるまでになるの
は大変でしょうが、頼って来る人を何もできないでただ帰すのではなく、
対応してもらえる機関に引き継げるようになって欲しいですね。誰
に相談すればいいのか、どこに連絡すればいいかなど、対応するノウハ
ウを身につけて、教会としての役割を果たして欲しいと思います」。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いたでしょうか。何が心に残ったでしょうか。それを静かに味わってみます。

2) 生活と社会を見つめ直して

- ・現代のホームレスやワーキングプアなど、生活困窮者の置かれている状況を想像してみましょう。「自業自得だろう」と簡単に批判する前に、そのような状況に陥らざるをえなかった彼らの苦しみを思いやってみましょう。
- ・多くのホームレスやワーキングプアを生み出しているこの社会の問題点は何でしょうか。なぜ多くの人が切り捨てられていく社会になったのでしょうか。そして、そのような状況に対して、教会は何ができるのでしょうか。

3) 主日の福音を黙想する

- ・神殿清めする激しいイエスの姿が描かれています（ヨハネ2・13-25）。イエスがそのような激しい行為をせねばならなかった動機を黙想してみましょう。結局は、神殿全体が金儲け中心主義になり、貧しい人を圧迫していたからではないでしょうか。現代社会を見て、イエスはどのような怒りを感じられるのでしょうか。

4) 祈り－殉教者の取りなしを願って－

「自らの苦難と嘲笑と人びとへの怖れをいよいよ大ならしめんがために放たれ」（ソテロの報告より）、身体障がい者の身にされ、差別された人々と暮らした福者ヨハネ原主水（＝江戸の殉教者）の取りなしで祈りましょう。

「この社会がどんなに冷淡なものであったとしても、教会や私たち自身が、苦しんでいる人々の実像を知り、彼らの助け手になっていくことができますように」。

小さな生命をいつくしむ社会へ

「こうのとりのゆりかご」は願う

「こうのとりのゆりかご」（以下「ゆりかご」）。様々な事情で育児ができない親から新生児を匿名で預かる仕組みが2007年5月、熊本市の慈恵病院で始まった。新聞やテレビが「赤ちゃんポスト」という刺激的な名称で取り上げたこともあって、当時、賛否両論がマスコミをにぎわした。「助けられる生命いのちがあるなら、やるべきです」。この信念で日本で初めて病院として取り組みを始めた蓮田太二はすだたいじ理事長と、スタッフの先頭に立つ田尻由貴子たじりゆきこ看護部長を2008年7月に訪ねた。

開設最初の年度の08年3月末までに慈恵病院に託された人数は計17人で、うち10人は身元が判明した。いずれも、関東から九州まで熊本県外の赤ちゃんで、それぞれ出身地児童相談所に引き取られた。身元が分からない7人は県内で育てられているという。この期間に、電話などで寄せられた「妊娠に関する悩み相談」も約500件。熊本県・市の分も合わせると3倍に上る。病院で対応した半分は県外からの相談だったという。以前は年間50件ほどだったのに、この激増ぶりは、誰にも相談できず悩む女性がいかに多いかを示している。

こうした歩みをふり返って、蓮田理事長も田尻部長も口調は物静か、包み込むような笑顔が絶えない。「ゆりかご」は生命を助けるための緊急避難設備であり、まず相談に乗り赤ちゃんの産み捨てを防ぐ対応をし、さらに共に悩む姿勢で母親自体の救済にもつなげるという運用の基本を貫いて設置の目的が実現し、緊張が少し和らいだ様子も伝わってくるようだった。

絶え間なく伝えられるキリスト

慈恵病院はマリアの宣教者フランシスコ修道女会運営の病院を母体に1978年、新たな医療法人となった。現在は理事長を除いて職員にカトリック信徒はいないが、病院入り口の横には大きな、幼子イエスを抱く優しい表情のマリア像。壁に掲げられた病院の理念の1番目に「キリストの愛と献身の精神を信条とします」とうたっている。一人ひとりの職員のネームプレート裏にも病院の理念が印刷され、「職員には、キリストの精神が徹底的に伝えられています。この病院からキリストの精神が消えることはありません」と看護部長はきっぱり。病院まで乗ったタクシーの運転手は「地域の人は大体支援していますよ、『ゆりかご』ができて、産まれた子どもを殺したような大きな事件は聞きませんね」と、どことなく誇らしげに説明してくれた。「あのキリストの愛に基づいている病院がすることだから、あの蓮田先生がなさることだから・・・」と「ゆりかご」は私たちの想像以上に地域の人の理解と信頼に支えられていることが実感できた。

母親も救えなかったという悔しさ

理事長は、大学病院の産婦人科に勤務していた。大学病院では、最終的には「中絶」することを拒否できない。そこに、子どもを産んだ女性が育てることができず、自分の手で殺してしまう事件が3件続けて起こり、長年温めてきたというより、目の前の出来事にいたたまれず「ゆりかご」設置にかかわったというのが本音だそうだ。「神様からいただいた尊い生命を救うこともできなかったが、わが子に手をかける前に母親を救うことができなかったことが悔しい。また、たとえ手をかけなかったとしても、わが子を捨てたという罪の意識を引きずることなく、母親には新しい出発をして欲しい」。

開設から1年半経っても非難や攻撃の電話はかかる。それは「子どもを捨てることを助長している」とか、「ゆりかご」の匿名性から「子どもの本当の親を知る権利を奪う」という当初からの反対論と同じ意見だ。理事長は、こういう非難も正面から受け止めている。それでもなお、そ

れ以上に「生命の大切さ」を選ぶのだ。「中絶という形で、生を受けなかったかもしれない生命、この世に出た途端抹殺されたかもしれない生命、神様から人間が託された生命を一人でも多く救いたい。これが私の使命」。その思いが、どんな非難にも屈しない強い支えとなっている。「このような大切なことは、時間をかけて説明しなければいけません。シンポジウムで時間に制約があり、司会者に袖を引っ張られても私はゆっくりと説明するのです」と語る理事長。淡々と、だが大切なことは譲れないという態度がうかがえる。なお続く非難や批判は、慈恵病院の職員の働きを知らない県外からがほとんどだという。実は「ゆりかご」の設置の準備は時間をかけて周到に進められていた。行政との連携方法を詰めるとともに、2004年には理事長が類似の施設が80カ所もあるといわれるドイツを視察した。その成果は24時間体制の電話相談や匿名性の確保などに生かされ、熊本県・市との協力も緊密に行われている。

3人が交代で24時間対応

一方娘の妊娠を、更には出産してしまったことも知らない母親がいるという現実もある。それは堅いといわれる職業、信仰をもつ家庭も例外ではない。そういう家庭では妊娠のことは誰にも相談できず一人で悩み苦しむのだ。安易な気持ちで繰り返す性行為で10代の妊娠は確かに増加しているし、小遣いを得るための援助交際の結果の妊娠もある。しかし妻のいる男性との関係で妊娠する場合や、全く一方的な男性の暴力による妊娠のように、男性によって心身ともに傷つけられる女性も多くいる。

そういう悩み苦しみの中で、女性はこの「ゆりかご」の存在に気づくのだ。「ゆりかご」は赤ちゃんの生命を守るだけでなく、安心して相談できる場所としての使命も果たしている。部長ほか2名の看護師は24時間携帯電話の電源を切らず、相談を受けている。深刻な電話ほど夜中にかかってくるからだ。最初の勇気ある電話に即座に応答することが生命の誕生につながる。何度か、長い時間話し合うことによって築かれていく信頼関係の中、偽名が本名に変わり、家庭の事情も打ち明けるように

なる。親を交え、本人と理事長、看護師が一緒になっての話し合いの結果、自分の手で育てる決心ができる母親もいる。

しかし、どうしても自分の手で育てることができない境遇の母親には、産まれた生命を守るため、また母親が、過去に縛られず新しい生活に入れる環境を整えるため、里子に出すことや養子縁組することを勧めている。わが手で育てられない母親がいる一方、養父母となることを希望する相談は2007年度は200件以上あり、子どもを授からない家庭にとっても「ゆりかご」は救いの場、生きる希望の場となっている。

「ゆりかご」の不要な社会にしたい

理事長は、現代の日本社会の虐待や凶悪事件を憂え、その原因は、相手を大切に思うことの欠如、生命の教育がなされていないこと、家庭の崩壊にあると指摘する。そして、今最も必要なことは互いに相手を尊重する心を育て、思いもよらない妊娠であっても「お腹に宿った生命は神様から頂いた尊い生命である」ことを家庭や学校で教えることだと考えている。そこで慈恵病院としてもこれまでに「生命を大切にすることを主眼とする性教育の出張講義」を100回近く行っている。

「たとえ一時『ゆりかご』に子どもを預けたとしても、行政や周りの人の支えで再び自分の手で育てることができる社会になって欲しい、最終的には『ゆりかご』が必要ない社会になって欲しい」。それが「ゆりかご」が向かっている方向である。

「子どもを『ゆりかご』に預けたことを非難することは易しい。でも預けた女性の背景を問うべきではない。オーストラリアでは『赤ちゃんにたった1枚でも産着を着せていたら、それは生命を助けたいと願っている証拠だ』と言われています。そういう女性を責めてはいけません」。蓮田理事長の言葉はそのままヨハネ福音書8章の「姦通の女」に対するイエスの態度と重なる。慈恵病院はこうして「キリストの証し」を続けている。「『ゆりかご』のこれからについて何の迷いもありません」。神様から与えられた生命を大切に、苦しむ女性の心を救いたいという蓮田理事長の信念には全く揺るぎが見られない。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いたでしょうか。何が心に残ったでしょうか。それを静かに味わってみます。

2) 生活と社会を見つめ直して

- ・さまざまな形で生命が軽んじられている社会の現状をどう感じるでしょうか。望まない妊娠と中絶手術の増加、養育放棄、幼児虐待、いじめ、引きこもりなどなど、小さな生命が危機にさらされている現状をどのように受けとめればよいでしょうか。
- ・「ゆりかご」が不要な社会になっていくために、自分（たち）ができることは何でしょうか。小さな生命をいつくしんでいく心がけや働きはどのようなものでしょうか。

3) 主日の福音を黙想する

- ・「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ 3・16）。その神の愛を味わってみましょう。それは、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と。一人も滅びないことを神は望んでいるのに、多くの胎児が妊娠中絶され、さらに生まれてきた子どもたちがさまざまな虐待を受けている現代社会。「光が世に来たのに、その行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ」人々（3・19）。神は今、私たちに何を語りかけているでしょうか。

4) 祈り－殉教者の取りなしを願って－

「イエスさまはカルワリオへ歩いて登りました」（福者林田ディエゴ＝島原半島有馬の12歳の殉教者）。

「現代では、多くの胎児、赤ちゃん、子どもたちが不条理な苦しみを受けています。殉教した子どもも福者たちの取りなしを願って祈ります。すべての子どもたちが神の恵みの内に生を受け、愛を受けて成長できますように。またそのために私たちも子どもたちを見守っていくことができますように」。

今日のいのち、喜ぶ人々と共に

最貧国シエラレオネ支援30年



「お前たちを殺して焼く」。銃を構えた反政府軍兵士の声が響く。これが最後かなあ、死ぬってどんなことかなあ。両手をあげてジャングルの空を見上げた。月がとてもきれいな夜だった。忘れもしない、襲撃を受け修道院から逃れて3日目、98年2月16日の深夜1時頃。「マリア様、助けてください」と、ラテン語の「めでたし」を大声で唱え続ける。5分ほどしてそっと振り向くと、兵士たちの姿は消えていた。「神の人だから、よそう」と待ったをかけた仲間の主張に従ったらしい。助かった。「そのとき病熱で苦しむ私と、もう1人のシスター、イタリア人の神父様の3人は、やっとの思いで近くの村にたどり着き、ことの次第を話しました。村人たちは私をハンモックに乗せ、村々をリレーして、5時間かけて国連軍の駐屯地まで運んでくださり、そこからヘリコプターと航空機を乗り継いでイタリアに脱出したのです」。

戦火の中で子どもたちの教育

死の瀬戸際から帰還した体験を語るのは、御聖体の宣教クララ修道会の根岸美智子^{ねぎしみちこ}修道女。ローマの本部から派遣されて、1977年以来アフリカ西海岸の小国シエラレオネで教育支援の仕事に携わっている。平和だったこの国内戦が起きたのは91年。当初、南東部を支配していた反政府軍は徐々に勢力を広げ、94年12月にはシスターたちが活動する北部の町ルンサにも出没するようになった。クリスマス前の黙想会の祈りを始めたたん、爆弾の音と銃声がし、家々に煙が上がった。乱入してきた

兵士たちは、シスターたちを2列に並べてジャングルに連行した。途中、司祭が無線で政府軍に通報、銃撃戦の末に約7時間のとらわれの旅から助け出された。この最初の体験があって宣教師30人全員イタリアに逃れたが、後日シスター根岸ら責任者3人だけが戻り、現地スタッフとともに戦火の中で子どもたちの教育を続けた。そして2度目の恐怖に遭遇したのである。

ダイヤモンド利権をねらい隣国が仕掛けた

シエラレオネ。意味はライオン山地。15世紀に現在の首都フリータウンにやって来たポルトガル人が、背後の山の雷鳴に驚いてこう名づけたという。北海道より少し狭い国土に約500万人が住む。平均寿命38歳、世界で一番短命の国。子どもが5歳までに3分の1近く死んでしまう。40%以上の子どもが働いている。半数以上の人を読み書きできない。貧困を示す指標に「世界一」が並ぶ。

この世界最貧国の一つで良質のダイヤモンドが産出したことが悲劇を招いた。ダイヤモンド利権をめぐる91年3月戦闘が始まった。黒幕とされるのは隣国リベリアのテラー大統領（当時）。多くの少年兵を含む兵士を訓練し、シエラレオネ国内の革命軍を装って戦わせ、背後から軍事支援をして優位に立った。麻薬を打たれ判断力を奪われた少年・児童兵士らによる無差別の略奪、暴行、虐殺。肉親さえ殺害した。大量の密輸ダイヤモンドが裏市場に流れたという。国連安保理が介入するなど曲折を経て99年11月に停戦合意。02年1月までに反政府軍は武装解除、解体されて少年兵数百人も解放された。

「パパゴッド」信じ苦しみに立ち向かう子どもたち

平和が戻った。しかし内戦の死者5万人、その他の被害者50万人以上、その中に手や足を切り取られた少年たち数千人を含む。シスター4人も犠牲になった。傷跡が癒えるには時間がかかりそうだが、中学・高校の校長を務めるシスター根岸始め、会の16人はこの年、活動を再開した。白幡和子^{しらはたかずこ}修道女も一緒に働いている。運営する幼稚園から高校、職

業訓練センターまでの校舎は、教室や机・イスも足りないながら、廃墟からやっと雨露をしのげるまでに立ち直った。3000人の女生徒が学ぶ。手のない生徒、失明させられた生徒も2人ずついるという。

「シエラレオネの子どもたちは、どんな苦しみに遭っても生きようとします。日本人との違いを感じます。天の『パパゴッド』（父なる神）がいるから私がいる、パパゴッドが生命をくださるという思想があるのです」と、シスター根岸は感嘆する。「毎年元旦には子どもたちが歌います。『パパゴッド、今年も死ななかった、サンキ（ありがとう）』と、きょう生きていることに感謝するのです」とも語り、背景に短い人生を生きる人々の信仰心を見る。「ある日、ひとりの人が息を引き取ります。周りの人々は『また会いましょう』と泣きながら歌って墓地に向かい、白い布にくるんだ遺体を横たえると木の枝を載せ、土をかけます。神様の元に帰るのを静かに見送るのです」。

学校給食は栄養不足を補うため欠かせない

懸命に生き学ぶ生徒たちを見守るシスターの大きな悩みは、給食費用の確保。1日1食でかつかつ暮らす家庭が7割もあるので、提供する給食は栄養不足を補うために欠かせない。だが07年から物価の高騰が続き、中国やベトナムから入る主食のコメは1.5倍にも上がった。国際機関の支援食糧も手に入りにくい。日本からの支援に助けられている。

給食がどれほど大事かは、日常の食事から想像がつく。たいていは自給自足の質素な生活。わら屋根の下に石を3つ並べたカマドでご飯を炊く。むしった干し魚と刻んだイモの葉にスープの素と塩少々と唐辛子で味をつけた汁が出来上がると、大きな器に移したご飯にかける。車座になった家族が、いっしょに手で食べるのだ。「パラパラのご飯が、人々には素晴らしいごちそうなのです」とシスター根岸。

外から見れば貧しくても、初めて訪れた77年頃は大変のどかだった。月が出ると、おじいちゃんの話に子どもたちが耳を傾け、ダンスをする。楽しい毎日だった。「ただし、女の子は学校なんか行く必要はないという考えが支配的でした」とシスター。それで「女の子をぜひ小学校

に上げてください」と1軒1軒説得に歩き回った。こうして80年から教育がスタート、87年には給食援助も始まった。幼稚園から高校まで整い、宣教活動も順調に推移していた。「内戦」の混乱までは・・・。

アフリカに行った訳は・・・

不幸な中断もあったが、30年に及ぶアフリカでの生活はシスター根岸にとって何だったのか。「私はアフリカが好きで行ったのではありません。なぜ好きでもないところに行ったのかと言えば、気の進まないことにチャレンジするとき、真の幸せと出会えるのではないかと思ったからです」と当時を回想する。

こうして選んだシエラレオネだったが、98年に反政府軍からの逃避行の途中、神様に文句を言おうとしたことも「告白」する。ジャングルの夜、じっと隠れていると背中にシロアリがむずむず、ちかちか。ネズミも蚊もやってくる。「神様、どうしてこんなことになるのですか。よいことをしようとしているのに・・・と不満な顔で天を見上げました。その時心にささやく声が聞こえました。『私は父母とエジプトに逃げなければならなかった。生まれてすぐ避難民だった。援助も何もない。あなたよりもっとひどかった。その宣教師なのに何を言っている。“貧しくてかわいそう、上げる”と、いつも上からの視線ではないか。同じ立場で同じ苦しみを味わい、物を乞う。この経験がなければ本当の宣教師ではない』と。主キリストがすぐ前にいるように感じました。ごめんなさい神様。その時喜びがあふれ、熱のあることも忘れたほどです」。

08年夏、シスター根岸らは休暇で一時帰国し、滞在中の大半の時間をシエラレオネの現状報告に使った。北海道から沖縄までいる支援者に会い、講演をして感謝を伝える目的からだった。「平凡な一修道女ですが、アフリカにいるお陰で現地の人々を喜びとし、日本の善意の人々と知り合うことができました」と。それは、『サンキ、サンキ、モモヨ、モモヨ、ジャパン ピープル!』（おいしい食事をありがとう、日本のみなさん）という、子どもたちの笑顔を運ぶ旅でもあった。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いたでしょうか。何が心に残ったでしょうか。それを静かに味わってみます。

2) 生活と社会を見つめ直して

- ・貧困の中でも、「パパゴッド」から与えられた命を感謝するシエラオネの人たち。私たちは自分の生活の中で、どのようなことを具体的に神に感謝することができるでしょうか。
- ・シスターがジャングルの中で、神様に祈った時、イエスの境遇（幼いころ難民だったこと）を思い、自分の宣教師としての態度を悔い改めて、大きな喜びにあふれたとあります。私たちは今、何を思い、何を反省し、何に喜びを見いだしていくのでしょうか。

3) 主日の福音を黙想する

- ・「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネ12・24）。文字通りには、イエスや殉教者の死の意義を説明しています。では、私たちの場合、「地に落ちて死ぬ」、「自分の命を憎む」を比喩的に解釈してみよう。それは、どういう態度（心のあり方・生活の仕方）の変化を意味するのでしょうか。

4) 祈り－殉教者の取りなしを願って－

「殉教者の血は教会の種となる」（「マルチリオの勧め」キリシタン時代、殉教の危険が迫った中で書かれた殉教のところがまえを記した本）。

「主よ、さまざまな苦しみを経験しながら、宣教に励んだ殉教者の取りなしを願って祈ります。私たちも自分の使命を果たしながら、困難を受けとめ、神の恵みをより深く味わっていくことができますように」。

生活の安全を援護

外国人のための医療相談会

このところ、街角で外国人の姿を見かける機会が多くなってきている。実際、旅行者ではなく、日本に生活の拠点を置いている外国籍の人は、200万人を超えているという。カトリック教会も例外ではない。日曜日には、日本人よりもはるかに多くの外国人がミサにあずかる教会も現れてきている。ところで、その人たちは、安心して暮らすことができるのだろうか。誰にでも起こりうる病気という観点から、北関東で移住労働者の支援を続けている西沢宏隆にしざわひろたかさん（仮名）に、話を聞いた。

西沢さんは、10年前から医師や看護師、そして通訳など50人ほどのボランティアとともに健康診断の場を提供している。「人は健康を損ねてしまうと、食べて、寝て、働いてという基本的な生活のリズムを維持できなくなってしまうのです。特に社会保障の枠の外で暮らさざるを得ない、ビザの期限を超えて違法に滞在するオーバーステイの人たちは、ひとたび病気になると、どんどん生活が困窮してしまいます。『なぜそこまでして医療相談会をやるの』とあきれられることもありますが、誰もやらなければ、続けるしかありませんね」と西沢さんは笑いながら語る。移住者の中でもっとも困難な生活を強いられている人たちの健康を気づかって、2008年も「外国人のための医療相談会」が行われた。

子宮ガンの検査のために婦人科検診車を

「500円の自己負担で、子宮ガンの検査ができるんですよ」と2007年になってやっと懸案が実現した喜びを表す西沢さんの説明によると、通常は3700円が必要なところ、医師がボランティアでかかわってくれることで2000円を浮かせ、医療相談会が1200円を補助してこの金額になるとの

こと。検診車を使つての細胞検査を08年は16人が受けることができた。結果はガンの疑いのある人が日本人対象の一般の検診に比べて異常なほどに高率で、30～40歳の3人に陽性反応が現れて再検査の必要が認められた。「自分で身体の不調を感じていて、病院で受診する代わりに、せっぱ詰まってこの相談会に出かけてきたのでしょうか」と、この被疑率の高さの原因を推し量っている。

10年前の第1回には、150人もの方が参加したが、景気の変動や地域の雇用情勢のためか、あるいはオーバーステイの方が人目に付く場所に来られないせいか、年に2回開催されるこの医療相談会への参加者は、毎回30人くらいに減った。10カ国語に訳された問診票をそろえていて、身体測定、血圧測定、血液と尿の採取、胸部のレントゲン撮影を行い、通訳ボランティアの助けを借りて医師の問診を受けて検査が終了する。相談会から3週間後の結果報告会で、再検査の必要性などを本人に伝える。「検査結果を治療につなげるために、医師は紹介状を書くこともしばしばです」という。また、普通の病院ですでに受診していても、言葉の壁で自分の症状をきちんと伝えられない人にとってはこの相談会は「正しい診断」を得るよい機会になっている。

西沢さんが気になっていることの一つは、教会との接点がない移住者の健康である。フィリピン、ベトナム、南米諸国など、カトリック人口の多い国から来た人々は、間接的であれ教会とつながっていて、この医療相談会の情報が届きやすい。しかし、タイやカンボジア、ミャンマーなどから来た人々への広報活動はなかなかできないという。今、タイの大使館とタイ人のボランティアの協力のもとで、北関東を回って医療相談会を伝えていこうとしている。その背景には、相当数のタイ人の女性が性産業にとりこまれている事情があるからだという。タイ人ばかりでなく、エンターテイナーとして働いている女性たちは、性感染症やエイズの不安を抱えている人が少なくないのだが、自分からそれについて相談する場はほとんどないのが実情だという。

ワーキングプアである違法な就労者たち

日本で働いている外国人には、いろいろな人たちがいる。70年代に来日したインドシナ難民、そして、90年の入国管理法の改正によって来日した日系人たちには、職に就くことが公に認められている。この人たちだけが、行政が認めている外国人労働者である。したがって彼らは、健康保険をはじめとする諸制度のもとで、生活の安全が保障されている。行政は、在留資格を失った人たちが存在していることを前提にはしていないが、その人たちが引き続き日本で暮らしていることも事実である。たとえ違法な就労者であったとしても、勤め先が日本の大企業の系列に入っていれば、その人たちは定期的に健康診断を受けることもできる。

ところが、中小企業や個人事業主のもとで働いている違法な就労者たちは、身体の安全についてのすべての機会が失われている。検診も受けられないし、保険もない。月曜日から土曜日まで一生懸命働いても、彼らが得る年収は200万円ばかり、しかも、違法な就労者であれ支払われる給料からは、所得税が源泉で徴収されている。税金を払いながら、全く行政のサービスを受けることができない違法な就労者には、人間として安全に生活する保障が全くなっている現実がある。彼らの生活の安全保障のためには、西沢さんたちの「外国人のための医療相談会」は不可欠なのである。

子どもの将来が気がかり

長年にわたって外国人の支援を行ってきた西沢さんは、自らの意志で日本に来たわけではない子どもたちや、二世、三世の将来を心配している。「ダブルの子と言われて、日本と母国の二つの文化をもって豊かに生きる希望に満ちた将来が開けているようにも考えられるけど、実際は日本語も母国語も中途半端になって、学校に行かなくなってしまう子たちがいる」と語る。「言葉ができる子は、大学進学だって十分に可能だが、できなければ中学でおしまい。今の日本で中学卒だと、いくら働いたとしても20歳代後半から格差が広がっていってしまうでしょう。また、両親がいつ母国に帰ろうと言い出すかも知れないでしょう。子ども

たちは不安でいっぱいなんじゃないのかな」と。二世の若者たちの間では、同棲生活をしている者がとても多いという。夢や希望がないまま、不安の中で暮らす子どもたちは、性的関係や薬物に依存する生活に陥りやすいのではないかと、西沢さんは見ている。「医療相談会のほかに教会がやるべきことは、子どもたちに日本語をきちんと教えることだ」と力説するが、「自分にはもう余力はないので、誰かがやってくれることを祈るばかり」と、子どもたちに対する愛情の大事さを訴えている。

ローカルで培った正義の根本思想は世界と通じる

西沢さんは、地域での地道な活動を行うかたわら、カトリック教会の正義と平和の活動にも積極的にかかわっている。「憲法第9条を守ろう」と呼びかける会合やデモで、西沢さんをよく見かける。西沢さんだけでなく、福祉や社会活動の現場で毎日身を粉にして奉仕している人を、なぜか「九条の会」の関連でよく見かける。

「『自分の問題と世界とはつながらない』という人がよくいるけど、自分だけの宇宙で暮らしては、世界はよくなりません。『現場を見てみろよ、こんなに苦しんでいる人たちがいるんだから』と世界に向かって叫ぶことも、私に与えられた使命の一つなのかも知れない」と語る西沢さん。生活の安全保障は、移住者一人ひとりにとっても、また、グローバルな「先制攻撃はしない、紛争解決の手段として武力は用いない」といった国家間の約束においても、正義という観点で共通の思いから発せられた根本思想に基づいていると、西沢さんは理解している。「“Think globally, Act locally”（地球規模で考え、自分の場で行動しよう）」という環境保護運動の標語は、正義の推進においても全く共通。そして、現場でも世界に向けても、社会の不正義を声を大きくして訴えていかなければならない」と強調する。

一人ひとりの生活の安全が保障される社会を築くために、小さな奉仕を束ねる西沢さんの生き方は、今日からでもすぐに真似をすることができそうな、私たちにとって自然な姿勢なのではないだろうか。自分の場では何ができるかを真剣に考える機会を、西沢さんは提供してくれている。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いたでしょうか。何が心に残ったでしょうか。それを静かに味わってみます。

2) 生活と社会を見つめ直して

- ・「現場を見てみろよ、こんなに苦しんでいる人たちがいるんだから」という言葉から、自分の出会う現場はどこでしょうか。その現場をまずふりかえってみましょう。
- ・「地球規模で考え、自分の場で行動しよう」というスローガンを自分に当てはめてみましょう。どのような社会を目指して、どのような具体的行動へと呼ばれているのでしょうか。

3) 主日の福音を黙想する

- ・マルコ福音書の長い殉難物語（マルコ14・1-15・47）を読み直してみましょう。イエスの苦しみや人々の罪をよく見つめるとき、この物語は現代に生きる私たちに何を語りかけているのでしょうか。

4) 祈り－殉教者の取りなしを願って－

「自分自身と同胞の救いのために前進しようという大きな希望を抱いています」（福者ペトロ岐部司祭殉教者）。

「主よ、イエスの苦しみ・殉教者の苦しみを思い起こして祈ります。私たちがこの社会・世界・地球全体の救いを願いながら、神のため、人々のために自分にできることを地道に果たしていくことができますように。イエスと殉教者の苦しみを無駄にすることなく、彼らの取りなしによって、神の国を共に築いていくことができますように、私たちを守り、導いてください」。

Ensuring the Security of Life

Medical Consultation for Foreign Residents

Foreign residents are seen frequently in towns these days. In fact, the number of foreign nationals living in Japan, not as tourists, is said to exceed 2 million. The Catholic Church is no exception, as many more foreigners than Japanese are attending mass on Sundays in some churches. However, it is questioned whether their security of life is properly guaranteed. From the viewpoint that anybody may become sick, Mr. Hirotaka Nishizawa (assumed name), who has been supporting migrant workers in the North Kanto area, tells us about the situation.

Mr. Nishizawa has been offering opportunities to take medical checkups for 10 years with 50 volunteer staff including doctors, nurses and interpreters. He said with a smile, "If someone becomes sick, he or she can not keep the basic daily rhythm of eating, sleeping and working. That is especially true for undocumented overstaying foreigners with expired visas, who must live without social security benefits. Once they get sick, their lives will become poorer and poorer. When asked amazedly why I am so eager to hold medical consultations, I said I cannot help but keep on doing so, if nobody else does." The "Medical Consultation For Foreign Residents" was held again in 2008, concerning the health of immigrants who live the most difficult lives of all.

Gynecological Exam Vehicles for Womb Cancer Screening

“Womb cancer screening is available for only ¥500,” Mr. Nishizawa said cheerfully as he could finally realize this price setting in 2007. According to his explanation, the original price of womb cancer screening was ¥3700. However the cost was reduced by ¥2000 as doctors chose to work as volunteers, and another ¥1200 was deducted because of donations from a volunteer group. In 2008, 16 foreign residents were able to take the cell exams by visiting the exam vehicle. The outcome was that the ratio of suspected cancer cases was much higher than that of general checkups among Japanese. Three foreign residents from 30 to 40 years old had positive test results and needed further examination. He suggested that the suspected ratio was high because they probably had some kind of physical disorder and came to the consultation as a last resort instead of going to hospitals.

There were as much as 150 participants at the first medical consultation. However, the number of participants at each semiannual consultation was reduced to about 30. This is probably due to economic fluctuations and the regional employment situation, or because overstaying foreigners are anxious about coming to places open to the public.

At the consultation, the questionnaire is translated into 10 languages. The checkup process starts with a body measurement, followed by a blood pressure check, the collection of blood and urine, a chest X-ray, and finally a doctor’s interview with the help of volunteer interpreters. The results of the exams, which include whether a re-check is necessary, are reported in a meeting held 3 weeks after the consultation. He said, “The doctors often write referrals so that the checkup results will link to appropriate medical treatments.” Meanwhile, this consultation has become a good place to get a “correct diagnosis” for those who already consulted with a doctor but could not

report their symptoms accurately due to the language barrier.

Mr. Nishizawa is also concerned about the health of immigrants not connected with the Church. People from countries with huge Catholic populations such as the Philippines, Vietnam, and South American countries are related to the Catholic Church in some way, although indirect, and they are likely to get the information regarding this medical consultation. Meanwhile, advertisement to those from Thailand, Cambodia and Myanmar is very difficult. With the help of Thai Embassy staff and volunteers, he now plans to go around and inform about this consultation in the northern Kanto area. That is because a large number of Thai women, who are working in the sex industry as entertainers, are afraid of sexually transmitted diseases and AIDS, but in reality there are few places where they can get advice about that.

Undocumented Migrant Workers as the Working Poor

Various types of foreign residents are working in Japan. Foreigners officially admitted to work in Japan are the Indochinese refugees who came to Japan in the 70's and those of Japanese descent who arrived in Japan after the Immigration Control Law was amended. Only these people are officially admitted migrant workers whose security of life is guaranteed by various systems such as health insurance.

Although the foreigners who lost residential status are not officially supposed to live in Japan, they actually keep on living in Japan and are called "overstayers". Even Undocumented Migrant workers can have medical checkups on a regular basis if their employers are affiliates of large enterprises.

However, the Undocumented Migrant workers in small and medium-sized enterprises or one-man businesses are deprived of all

the opportunities concerning the security of life. Neither medical checkups nor health insurance is available to them. Even if they work hard from Monday to Friday, their annual income is merely about 2 million yen. In addition, income tax will be deducted from the Undocumented Migrant workers' income. In fact, these Undocumented Migrant workers are not guaranteed at all to live safely as human beings, because they cannot receive any public services although they pay taxes. Therefore the "Medical Consultation For Foreign Residents" has become all the more necessary for their security of life.

Concern about the Future of Children

Mr. Nishizawa is also concerned about the children who came to Japan involuntarily and the succeeding second and third-generations. He says, "They are often called children of double cultures, and regarded as promised children with hope to live prosperously enjoying the two cultures of Japan and their mother country. However, in reality their language skills in both Japanese and the mother tongue often ends up being halfway, and some of them quit going to school. Children with enough language ability can even go to universities, but those without it tend to finish education after graduating from junior high school. In Japan today the income gap between junior high school graduates and the others starts to widen when they are in their late twenties, however hard they work. Moreover, their parents may start talking about going back to their country at any moment. The children seem to be full of anxiety." He thinks that those anxious children without dreams or hopes tend to fall into lives dependent on sex relations or drugs. As a result, many second generation young people end up living together with their boy or girl friends. He insists that it is important to love these children and says, "In addition to providing medical consultations, the Church should teach proper Japa-

nese to the children. I just keep on praying somebody does it because I don't have energy to spare for that."

Locally Developed Basic Ideology on Justice Is Applicable to the World.

Besides working steadily in the local community, Mr. Nishizawa actively takes part in the justice and peace activities of the Catholic Church. He is often seen in the meetings and demonstrations appealing to "protect Article 9". Many other people serving earnestly at welfare or social activities are also frequently seen in the meetings of the "Article 9 Association".

Mr. Nishizawa says, "It is often said that personal problems have nothing to do with the world. However, people will never understand the global situation while living only within their own space. One of my missions must be to appeal to the world to look at the reality where many people are suffering so much."

Mr. Nishizawa believes that the security of life is based on the fundamental ideology derived from a sense of justice. This is true not only in the case of each foreign resident but also in the global promises among nations to "renounce preemptive strikes and use of force as a means of settling disputes". He emphasizes, "The environmental movements' slogan, "Think globally, Act locally" can be completely applied to activities to promote justice. We must earnestly protest against injustice in society both on the spot and in the world."

Mr. Nishizawa has been piling up small services to build a society where everyone's security of life is guaranteed. His way of life seems natural to us so that we may follow his example even from today. Mr. Nishizawa is offering us an opportunity to think seriously of what can be done where we live.

Review

1) Strengthen your impression.

What impressed you after you finished reading this article? What remained in your heart? Let us appreciate it calmly.

2) Look anew at people's lives and society.

Regarding the quote from the article, "Look at the reality where many people are suffering so much," where do you confront reality? Let us look at the situation there at first.

Please apply the slogan, "think globally, act locally" to yourself. What kind of society are you pursuing? What concrete actions are called for?

3) Contemplate the Sunday gospels.

Please read again the long Passion story (Mark 14:1~15:47). Let us contemplate the suffering of Christ and people's sin. How do they appeal to us living in the modern world?

4) Prayers –Requesting the intercessions of martyrs–

"I have great hope that I will be able to make progress on the way to my own salvation, and that I will be able to help my fellow Japanese make progress on the way to theirs." (Blessed Father Peter Kibe)

"Lord, we pray as we recall the suffering of Christ and martyrs.

Hoping for the salvation of this society, the world and the entire globe, may we make steady efforts to accomplish what we can for God and people.

Protect and guide us so that we may work together for the creation of the kingdom of God through the intercession of the martyrs, without rendering the suffering of Christ and these martyrs meaningless."

過越の物語を生きる

カリタスジャパン担当司教 幸田和生

人はある時この世に生を受け、ある時この世を去ります。人生とは結局、日々、死に向かって旅をしているようなものではないでしょうか？ もちろんそういう面もあります。しかし、キリスト教は決してそれだけではないと信じます。むしろ、苦しみと死を通して、神の生命へと向かっている旅だとわたしたちは信じているのです。それがイエス・キリストの歩みでしたし、数多くの殉教者たちはその歩みに続く人々でした。

キリストが受難と死を通して復活の生命へとよみがえられたことを祝う復活祭を、ラテン語では「パスカ」、すなわち「過越祭（すぎこしさい）」と言います。過越祭は旧約の時代、毎年春、春分の日後に祝われた祭ですが、それは神がイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から救い出してくださったことを記念する祭でした。キリスト教はイエス・キリストが死から生命へと移られたことを同じ「パスカ＝過越」という言葉で言い表すようになったのです。私たちキリスト信者は毎年、四旬節・復活節を通して、キリストとともにこの過越の物語を生きるようにと招かれています。それは、私たちがキリストとともに悲しみから喜びへ、絶望から希望へ、無関心から愛へ、闇から光へ、死からいのちへと歩んでいくことです。

四旬節のための小冊子であるこの『つなぐ』は、ただ単に人間の抱える厳しい現実に向けるためのパンフレットではありません。どんなに苦しい現実の中でも、神と人・人と人がつながることができれば、それは単なる苦しみだけの物語ではなく、キリストの「過越の物語」につながっていくと感じていただくためのものなのです。

四旬節・復活節の歩みを通して、私たち一人ひとりがこの過越の物語を豊かに生きるものとなりますように。

注記ならびにその他情報

「娘から教わった人間の価値」(11ページ)

(注1) ジャン・ヴァニエ：1928年、カナダに生まれる。ラルシュ共同体創立者

(注2) ラルシュ共同体：1964年ヴァニエ氏がパリ北郊のトロリー・ブルイユで知的ハンディを持つ2人と始めた共同生活がラルシュ(箱舟)と名づけられた。ラルシュ共同体は、現在30カ国131コミュニティに広がっている。日本には静岡にラルシュ・かなの家がある。

(注3) 「信仰と光」運動：1971年、ラルシュ共同体と同じ霊性を源にヴァニエ氏らがフランスで創設した。共同生活のかたちではなく、月に一度の集まりを活動としている。現在、約78カ国に1500の共同体がある。

「若者の実像を知ってほしい」(16ページ)

(注4) インターネットカフェ：パソコンが設置されインターネットが利用できる喫茶店。24時間営業で安い深夜料金を設定している店では、自宅や寮を諸般の事情で退去した人たちが、夜を明かす目的で利用するケースが多い。

(注5) シェルター：「避難所」という意味合いから、生活に困って助けを求めて訪ねて来る人を、緊急的に保護する施設を指す。日本では、ボランティア団体などが支援活動として開設している所も多い。

「小さな生命をいつくしむ社会へ」(21ページ)

慈恵病院(熊本市) <http://www.jikei-hp.or.jp/index.html>

「今日の命、喜ぶ人々と共に」(26ページ)

支援団体「手を貸す運動」 <http://www6.plala.or.jp/tewokas/>

お知らせ

〈日本カトリック司教協議会社会系各委員会発行物のご案内〉

日本カトリック司教団

メッセージ「すべての人の人権を大切に」 発行 2008.12.10

国連の「世界人権宣言」発表60周年にあたって、カトリック者として信仰の見地から人権の大切さを振り返る機会とするために、メッセージを発表しました。

日本カトリック部落問題委員会

『誰と共に生きるのか』A5判92頁 頒布価格400円 発行 2008.3.

編集 日本カトリック部落問題委員会（現・日本カトリック部落差別人権委員会）
この冊子は、ハンセン病問題を考える有志の会が2006年と2007年に横浜教区、東京教区、さいたま教区で行った「ハンセン病学智交流会」をまとめたものです。ハンセン病問題の理解を深め、差別偏見を克服するための啓発資料です。

日本カトリック正義と平和協議会

声明文 死刑執行に強く抗議します
2007年12月7日東京拘置所で藤間静波さん、府川博樹さん、大阪拘置所で池本登さん
発行 2007.12.13
2008年2月1日東京で持田孝さん、大阪で松原正彦さん、福岡で名古屋志さん
発行 2008.2.8
2008年4月10日東京で坂本正人さん、秋永香さん、大阪で中元勝義さん、中村正春さん
発行 2008.4.16
2008年6月17日東京で陸田真志さん、宮崎勤さん、大阪で山崎義雄さん
発行 2008.4.16
2008年9月11日東京で平野勇さん、大阪で萬谷義幸さん、山本峰照さん
発行 2008.9.15
2008年10月28日福岡で久間三千年さん、仙台で高塩正裕さん 発行 2008.11.6

死刑が世論に支持され、死刑執行が増加しているものの凶悪犯罪が一向に減らないのは、死刑が犯罪抑止につながらず、社会に暴力の連鎖を肯定している証しだと考え、教皇庁の「どんな凶悪犯罪に対しても非致死刑罰のみを政府は課すべきである」を引用して抗議しました。

声明文 在沖縄アメリカ海兵隊員による沖縄女性強姦事件に強く抗議する
発行 2008.3.5

声明文 中国のチベット人と宗教者への弾圧をやめ、平和的解決を図ってください
発行 2008.4.4

講演録 「平和のために働く人はしあわせ」
A5判76ページ 発行 2008.12.

1987年1月19日 西千葉教会における故・相馬信夫司教の講演録の再出版。世界人権宣言の全文を掲載しました。

日本カトリック難民移住移動者委員会

要望書「改正入国管理法に対する要望書」

発行 2007.11.21

2007年11月20日、「出入国管理および難民認定法」の改悪によって、入国審査時に日本版US-VISITが導入されました。特別永住者や16歳未満の外国人・外交官などの例外を除いたすべての来日・在日外国人に対して、顔写真を撮影、指紋採取の上、指紋データを照合するというものです。指紋採取強制は、外国人を潜在的テロリスト・犯罪者とみなす外国人差別であり、人権侵害であると考え、即時撤廃を求め要請しました。

講演会記録小冊子「未来の学びを拓く多文化・共生の風

～外国籍の子どもの就学について～ 狩浦正義師（名古屋教区司祭）

A 5 判31p

発行 2008.3.23

外国籍の人々を受け入れている地域において、同様の問題を抱える人々の助けとなり、地域社会の具体的活動の一助になるよう、国内でも多くの外国籍児童を有している愛知・静岡地域における教育の取り組み、外国籍児童の就学問題の現実と背景、また解決に向けてのヒントを盛り込んだ講演録です。

〈カリタスジャパン発行物のご案内〉

第5回社会福祉セミナー講演録「虐待・暴力と福音」

B 5 判128頁 頒布価格250円（郵送費別）

発行 2008.10.1

カトリック全国社会福祉セミナー「虐待・暴力・性暴力に被害者の視点で向き合う」（2006年11月22～24日東京カテドラル）の講演録です。

第一部 「虐待・暴力・性暴力」は、なぜなくなるのか：
社会の構造から考察する

第二部 子どもや女性にとって暴力を受けるとはどういう
ことか

第三部 あらゆる暴力に「ノー」の教会を目指して
セミナー3日間の全ての内容をまとめました。

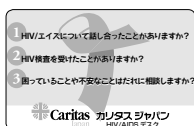
グループでの分ち合いなどにもご活用いただけます。



メッセージ「世界エイズデー メッセージ2008」 A 4 判 1 枚

エイズ啓発ミニカード カードサイズ（85×55mm）

発行 2008.12.1



エイズに対する理解を深めることができるよう、メッセージとミニカードを発行しました。掲示・携帯に便利のようにサイズを小さくしました。

カードの裏面にエイズ啓発サイトをご案内しています。

『叫び 合本：1997～2002』（四旬節キャンペーン小冊子）

A 5 判222頁 頒布価格400円（作成経費、郵送費込み）

発行 2003.1.12

前シリーズ『ひびき』の前のシリーズ『叫び』を創刊号から6年分まとめました。

『つなぐ2008』、『ひびき』のバックナンバーご希望の方は事務局にお申し込みください。郵送いたします。

2009年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2009年度四旬節キャンペーン資料として例年のように、四旬節キャンペーン小冊子『つなぐ2009』、ポスター、四旬節献金趣意書、献金箱、献金袋を用意いたしました。各小教区には「灰の水曜日」前後に届くよう手配しておりますが、追加要求等につきましては下記の各々所属教区宛にお問い合わせください。

尚、『つなぐ2009』には点訳本、録音テープが用意されております。

札幌教区	〒060-0031 札幌市中央区北一条東6丁目10 札幌教区本部事務局	Tel: 011-241-2785 Fax: 011-221-3668 e-mail: diooffice@csd.or.jp
仙台教区	〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12 仙台教区本部事務局	Tel: 022-222-7371 Fax: 022-222-7378 e-mail: kyoku-office@sendai.catholic.jp
新潟教区	〒951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町656 新潟教区本部事務局	Tel: 025-222-7457 Fax: 025-222-7467 e-mail: nig-cur@ecatv.home.ne.jp
さいたま教区	〒330-0061 さいたま市浦和区常盤6-4-12 さいたま教区本部事務局内 カリタスさいたま	Tel: 048-831-3150 Fax: 048-824-3532 e-mail: saitama-kyoku@mbm.nifty.com
東京教区	〒112-0014 東京都文京区関口3-16-15 東京教区本部事務局	Tel: 03-3943-2301 Fax: 03-3944-8511 e-mail: info@tokyo.catholic.jp
横浜教区	〒248-0006 鎌倉市小町2-14-4 カトリック雪ノ下教会 横浜教区福祉委員会	Tel: 0467-22-2064 Fax: 0467-22-4199 e-mail: yokohamafukushi@yahoo.co.jp
名古屋教区	〒466-0037 名古屋市昭和区恵方町2-15 名古屋教区社会福祉委員会	Tel: 052-852-1426 Fax: 052-852-1422

京都教区	〒604-8006 京都市中京区河原町通三条上ル 京都教区本部事務局	Tel: 075-211-3025 Fax: 075-211-3041 e-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp
大阪教区	〒540-0004 大阪市中央区玉造2-24-22 大阪教区本部事務局	Tel: 06-6941-9700 Fax: 06-6946-1345 e-mail: y.shiki@osaka.catholic.jp
広島教区	〒730-0016 広島市中区鞆町4-42 広島カトリック会館 広島教区本部事務局	Tel: 082-221-6017 Fax: 082-221-6019 e-mail: tob7105@mocha.con.ne.jp
高松教区	〒760-0074 高松市桜町1-8-9 高松教区本部事務局	Tel: 087-831-6659 Fax: 087-833-1484
福岡教区	〒810-0028 福岡市中央区浄水通6-28 福岡教区本部事務局	Tel: 092-522-5139 Fax: 092-523-2152
長崎教区	〒852-8061 長崎市滑石5-2-6 カトリック滑石教会	Tel: 095-856-8623 Fax: 095-856-8603 e-mail: claras1212@soleil.ocn.ne.jp
大分教区	〒870-0035 大分市中央町3-7-30 大分教区本部事務局	Tel: 097-532-3397 Fax: 097-538-6287 e-mail: cat-oita@oct-net.ne.jp
鹿児島教区	〒892-0841 鹿児島市照国町13-42 鹿児島教区本部事務局	Tel: 099-226-5100 Fax: 099-225-0440 e-mail: kagoxavi@poem.con.ne.jp
那覇教区	〒902-0067 那覇市安里3-7-2 那覇教区本部事務局	Tel: 098-863-2020 Fax: 098-863-8474 e-mail: chancery78@image.ocn.ne.jp

この冊子の編集にあたり、下記の点に留意しておりますが、お気づきの点を、ご指摘、ご教示いただけましたら幸いです。

- (1) 面談者のプライバシーに差し障る関係者、場所、その他の名称、氏名、住所、固有名詞等については、本人の承諾をいただいた方以外は、すべて仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をはりましたが、面談者が話しことばで使われている用語、用法はそのまま使用している場合があります。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音又は拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

四旬節キャンペーン小冊子 No.23 2009年

「つなぐ 2009」

2009年2月25日 発行

編集 日本カトリック司教協議会
カリタスジャパン
発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411
カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)

印刷 精興社
